

今からでも決して遅くはない ～大志を抱こう JSRT～

札幌医科大学附属病院 高島 弘幸

今回の研修では、CT, MRI, PET-CT, 分子イメージングなどに関する基礎的な部分から最近のトピックスまで聴講することができた。とくに分子イメージングに関しては、スタンフォード大学としても力を入れており、もっとも今後の発展が期待できる分野であると思われた。また施設見学では、Lucas center, Small animal facility で感銘を受けた。とくに MRI は、ヒト用 7T MRI や最新 3T MRI, 動物実験用 1.0T および 7T MRI など現状で考えられる最先端の充実した機器がそろっており、スタンフォード大学のスケールの大きさを実感することができた。

さらに、本研修では以下の事柄を議題としてディスカッションが行われた。私見を交えて報告する。

1. 学会の国際化と今後の学術大会について

今回のスタンフォード大学での研修をふまえ、日本の診療放射線技師が行っている臨床研究が決して劣っているものではないことに気が付いた。しかし、海外となにが異なるかといえば、我々の多くの研究報告が日本語で行われているため、海外に発進されていないことが問題点であると思われた。この問題の解決には、英語教育および学会・学術大会の国際化のための、長期的なビジョンが必要だと考えられる。さらに、学術大会の発表内容も見直すべきではないだろうか。現状は、多くの演題が採用されているが、その内容に関しては、もっと吟味すべきであり、採択率をもう少し低下させ、発表内容の質の向上を目指すべきである。現在の学術大会ではプレゼンテーションスライドを英語で作成することが推奨されているが、近い将来、抄録およびプレゼンテーションも英語としなければ、国際化への道程は遠い。しかし、採択率の低下やプレゼンテーションの英語化はいずれも参加者が減少することが懸念され、収益の減少にもつながると考えられる。この対策として、抄録およびプレゼンテーションが英語の場合には、学術大会参加費を免除するなどの対策も必要ではないかと考えた。

2. 研修後の私

スタンフォード大学における世界最先端の研究施設や環境を体験できることはいままでのないが、全国から集まった仲間たちとの語らいが最大の利益であった。同じ診療放射線技師という免許をもちながら、職業も様々であり、多方面からの意見を聞くことができた。とくに私は、教員として勤務している方や他の研究および臨床施設に勤務している方とのディスカッションが有意義であった。現在、多くの学生が考えていることや新人技師が直面する問題点、また今後の学会に望むこと、さらには診療放射線技師の将来展望について熱い議論をかわすことができた。

さらに、本研修を通じて、英語の必要性を再認識することができた。これは今から勉強しても決して遅くはないということも諸先輩方をみて認識できた。研修後の私は、英語の勉強に最も力を注ぐかもしれない。これから、我々の研究を世界に広めていくためにも、本学会全体で大志を抱くことを期待する。

最後になるが、本研修に快く送り出してくれた札幌医科大学附属病院放射線部の皆様、多大なるアドバイスをいただいた札幌医科大学整形外科 竹林庸雄先生、北海道部会会長 坂田元道先生に深謝したい。私は家族およびたくさんの人に支えられて今日があることを忘れない。今まで出会ったすべての人々に感謝する。



現地でユニフォーム交換したジョナサンとの2ショット
(スタンフォード大学病院 MRI 室にて)